

## 歯科医学教育の中での解剖学教育

### — 明治期より戦前までの書誌学からの視点 —

島田 和幸

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻 神経病学講座  
人体構造解剖学分野

## Anatomical education in dental school: From the perspective of publications utilized from the meiji period to the prewar period

Kazuyuki SHIMADA, D.D.S., Ph.D.

Department of Gross Anatomy Section, Field of Neurology,  
Advanced Therapeutics Course,  
Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences,  
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan

### Abstract

The present study focuses specifically on anatomical education over the course of dental school in Japan. Focusing on the first dentist training institutes (beginning with vocational schools for dentistry) up to past universities that gave way to dental universities and departments established under the new postwar system, I investigated the history of anatomy courses at each school as well as the educational contents at the time based on such information as descriptions of the content of representative anatomy textbooks authored by the anatomy teachers of the time. The results indicated as follows:

1. Regarding general systematic anatomical education, all educational institutions at the time, lectures were given by part-time teachers from medical schools. Based on the contents of textbooks at the time, the lectures centered on the systems and organs around the oral cavity, and did not appear to cover the whole body as the systematic anatomy.

2. Compared to systemic anatomy education, a greater amount of lecture time was dedicated to dental morphology, oral histology, oral embryology, and many textbooks covering these areas were also published.

3. Anatomical textbooks with titles beginning with “oral”, as in “oral anatomy”, were first published in 1949. All textbooks therefore had used the term “dental anatomy”, but the contents were limited to the systems and organs around the oral cavity. The term “oral” had not yet come into use at that point. As for books on systematic anatomy that covered the whole body, the first was a book entitled “Shikayô Kaibougaku” (Anatomy for Use in Dentistry), written by Ryojiro Futamura, that was published in 1925.

The above described historical review of anatomical education in the field of dentistry revealed that education was biased toward localized knowledge regarding the oral cavity, teeth, and the tissues and systems around the oral cavity. Since dentistry or oral medicine is also one of the field of general medicine,

it is considered important in the future to sufficiently provide systematic anatomical education concerning the whole body without distinguishing between medicine and dentistry at dental universities as well, from the perspective of nurturing dentists capable of also treating various systemic diseases.

**Key words:** anatomical textbook, anatomical education, dental school, oral anatomy

## 1 はじめに

歯科医師養成機関の設立時より歯学教育の中での解剖学教育内容がどのようなものであったかについてその当時に使用されていた解剖学教科書、一般（系統）解剖・歯の解剖学書を中心とした書誌学的な観点より調査を行なった。また歯学での解剖学の呼称として“口腔”と冠するようになったことについても“口腔”という用語は我が国での歯科医師養成機関が始められた頃から既に存在していたのか？ それともいつ頃からこの口腔が使用されたかについて調査を行ってみたがその詳細な記載はされていない。そこで今回、解剖学教育の内容と共に“口腔”という用語がいつ頃から歯学教育の中に取り入れられたかについて歯科医師教育機関の成立前と旧設の歯学教育機関が設立された頃の解剖学教室の歴史と共に当時の解剖学書の記載内容などを調査しながら考察を行ってみた。

## 2 方法

歯科医学教育のそもそもの原点は官立を中心として始まった医学教育とは異なり私立の歯医者養成機関に端を発している。そこで歴史的な調査を行なうにあたり、明治中頃から大正期そして昭和初期の頃に既に歯科医師養成機関（専門学校等）として設立されていたそれぞれの学校について調査を行なった。具体的には創設順に東京歯科大<sup>2,11,16)</sup>、日本歯科大<sup>3,16)</sup>、大阪歯科大<sup>4,16)</sup>、九州歯科大<sup>5,16)</sup>、日本大学歯学部<sup>10,14,16)</sup>、東京医科歯科大学歯学部<sup>12,13,16)</sup>及び戦後始めて旧帝国大学医学部を母体として設立された大阪大学歯学部<sup>16)</sup>について各校の大学記念誌や解剖学教室史及び当時各学校で解剖学教育に従事していた教員が著した当時の代表的な解剖学教科書に関してその記載内容等をも調査した。なお書物に関しては著者所蔵書及び国立国会図書館所蔵書と共に全国の医歯学系大学図書館に所蔵されている書を可能な限り調査した。

## A. 歯科医師養成機関に関する解剖学教育の歴史について

### 東京歯科大学<sup>2,11)</sup>については

明治5年に高山紀齋<sup>6,11)</sup>が、米国に留学し、米国の歯科医術開業資格を取得した後に帰国、明治23年芝区伊皿子町に「高山歯科医学院」として開校した学院に端を発している。高山紀齋の後継者となった血脇守之助<sup>2,12)</sup>により「東京歯科医学院」と校名は変更される。その血脇を頼って高山歯科医学院の講師となった人物の一人に細菌学者として世界的に有名になった野口英世<sup>1,7)</sup>がいる。彼はその講義の科目として歯牙形態学を担当していた。明治40年、専門学校昇格と共に「東京歯科医学専門学校」と改称し、同時に学校としての体裁を整え現在の東京歯科大学へと発展してきている。

解剖学教育<sup>16)</sup>の歴史としては高山歯科医学院開設当初は、海軍軍医和田八千穂、和田創之介により一般解剖学の講義が行われ、東京歯科医学院時代には奥村鶴吉<sup>2,11)</sup>が歯牙解剖の教育を行っている。また、一般解剖学、組織学は慈恵会医科大学の新井春次郎が担当していた。奥村鶴吉はその後「東京歯科医学院講義録」や「歯科医学講義」というシリーズ本の執筆・編集をしている。その中で『歯科解剖学』という著書を残している。また奥村と斎藤は歯牙解剖をも担当し、一般解剖学は新井政治と井上通夫が担当していた。昭和24年専門学校から大学（旧制）に昇格し系統解剖学、発生学を津崎孝道が担当、解剖実習を新井正治、歯牙解剖学・歯科矯正学を斎藤久が担当した。その後上條雍彦が解剖学講座に就任している。特色ある書として野口の口述書や奥村の『歯科解剖学』などは著名な書として残っている。

### 日本歯科大学<sup>3,6,16)</sup>については

中原市五郎氏が明治40年、共立歯科医学校として設立された。当時は解剖学、組織学は八田 恒（全身系統解剖学）が担当し歯科医師である能勢邦士が組織学及び歯牙解剖学の講義が行われていた。明治42年、共立歯科医学校が、「私立日本歯科医学専門学校」と改

名され当時の解剖学は医学士 新井千代之助（解剖学、組織学、歯科組織学）と東京帝国大学より二村領次郎（胎生学、比較解剖学）が加わり講義が行われるようになった。二村領次郎はその後、校長にもなっている。この二村領次郎により出版された著書として『歯科用解剖学』がある。昭和22年には、「日本歯科医学専門学校」が旧制「日本歯科大学」となり、解剖学の講義、実習は柴田 信、片山武夫により行われていた。特に柴田による『歯牙形態学』、『臨床歯科形態図説』などは現在にも残されている著名な書の一冊である。

#### 大阪歯科大学<sup>4,6,16)</sup> については

明治44年大阪市西野田大野町に「大阪歯科医学校」としては開校され、解剖講義は大阪高等医学校（現大阪大学医学部）から村松藤秀が外向き解剖学の講義を担当していた。歯科解剖学については東京歯科医専出身の杉山盤三が担当していた。昭和5年4月から、白敷美輝雄が、歯牙解剖学と系統解剖学の実習を担当した。一方、大正14年就任した小野寅之助は、口腔と歯の形態学の講座を確立した。昭和6年以降は、大阪医科大学（大阪大学医学部）解剖学教室の黒津敏行、高木耕三が解剖学の教育に従事した。小野の著書『実習用歯牙解剖学写真図譜』は著名な書の一冊として残っている。

#### 九州歯科大学<sup>5,6,16)</sup> については

大正3年4月に創立者の国永正臣により福岡市因幡町に設立された。創立当初、系統解剖学・組織学・胎生学は口腔外科部長の松井太郎（九州帝大医科大学講師、後の満州医科大学教授）が歯科解剖学を担当し歯科組織学は、歯科矯正学の斎藤嘉一郎（東京歯科医学専門学校卒）が担当していた。大正10年7月、財団法人・九州歯科医学専門学校を設立、4年制になった。この頃には九州帝国大学より進藤篤一と長松英一が一般解剖学を担当し、歯科解剖学・歯科組織学は京都帝国大学出身の佐野専三が担当していた。昭和24年、新制大学に昇格後は、中山、灘吉、三枝がそれぞれ分担して解剖学を教育した。九州歯科大学においては昭和24年になって解剖学教室を各担当別にするにあたり、初めて解剖学講座に口腔解剖学という名称が使用されている。

#### 日本大学歯学部<sup>6,10,14)</sup> については

大正5年に佐藤運雄により東洋歯科医学校として設

立された。大正10年には「東洋歯科医学専門学校」は日本大学と合併し、「日本大学専門部歯科」が誕生した。初期の解剖学の講義を担当したのは森田齊次（東京慈恵会医科大）、二村領次郎（東京帝国大学）、伊澤好為（日本大学歯科）、林 礼（慈恵会医大）および堀 泰二<sup>10)</sup>（東洋女子歯科医専）である。当時の解剖学教育者は全て医学部出身者による講義であった。昭和14年には慶応大学医学部より望月周三郎（解剖学）、谷口虎年（解剖学胎生学）および伊藤俊夫（解剖学組織学）が外向き講義を担当していた。昭和22年新制の日本大学歯学部の設置が認可されると慶応大学医学部より加藤信一、三井但夫が専任教員となり、解剖学教室の創設者となる。当時は歯に関する教育は歯科臨床科目の教授により行われていた様である。その例として中川大介<sup>6)</sup> 著の『歯牙解剖学』が現存している。

#### 東京医科歯科大学歯学部<sup>12)</sup> について

前身である東京高等歯科医学校は文部省歯科医師開業試験附属病院を母体として、昭和3年に設立された官立で最初の歯科医師養成学校である。昭和19年には「東京医学歯学専門学校」と校名が変更されている。昭和4年には東京帝国大学より、藤田恒太郎が着任し解剖学教室は開設され、歯の組織学は口腔外科学の金森虎男、歯の解剖学は補綴の川上政雄、系統解剖学は東京大学の西 成甫、組織学は森 於菟、発生学は井上通夫が学科目を担当していた。昭和32年になり歯学部の解剖学講座は二講座となり始めて口腔解剖学という講座名が発足している。この様に口腔解剖学教室として正式に命名されるのは東京医科歯科大が旧設の大学としては九州歯科大学について二番目である。解剖学教科書としては藤田恒太郎著の『歯科医学用解剖学教科書』『歯牙組織学及発生学』『歯の解剖学』『歯の組織学』などの書が現在も残っている。

以上旧設の歯科大学、歯学部解剖学教室の教育担当に関する歴史について述べてみた。その結果から当初の解剖学の教育はどこの学校でも系統（一般）解剖学は医学部からの教員による講義実習が行われていたことがわかる。一方、歯学部での独特な教育科目である歯の形態学教育は当時どこの学校でも“歯牙解剖学”という学科名で呼称されている。また講座名に関しては旧設の大学では伝統的に解剖学（系統解剖学、歯牙解剖学等）を担当する講座はすべてが解剖学教室又は講座と戦前までは言われていたようである。

次に「口腔解剖学」という呼称は正式にはいつ頃より使用され始めたかについて調べてみるとその起源と

して考えられるのは大阪大学歯学部設立の時期と一致する。大阪大学歯学部<sup>9)</sup>は戦後の昭和25年に大阪帝国大学医学部に設置された歯学科がその起源となる。医学部から独立し、国立総合大学として最初の歯学部として設置された。その設立の中でも口腔解剖学講座は、学部創設時に設置された6講座のうちの1つの講座となり、その後、昭和44年には口腔解剖学講座は二講座に分かれたとの記録がなされている。

この大阪大学歯学部設立当時に始めて口腔解剖学と呼称されたいきさつについての詳細な記述に関しては著者は未見であるが、大阪大学歯学部の開設時に医学部解剖学教室と歯学部解剖学教室とを区別する為に歯学部には“口腔”という名称が冠されたと著者は以前に先輩の解剖学教授から聞いたことがあるがその真実は確かではない。しかし、その後、新設の国立大学歯学部や私立大学歯学部設立時の解剖学講座の名称のほとんどが「口腔解剖学講座」という名称で呼称される様になっていることを考えると前述の様なことも理解できる。

次に歯科医学教育用の解剖学教科書についての書誌学的な調査を行ってみた。

## B. 歯科医学教育に使用された解剖学教科書について

歯学医師養成教育機関が設立される前後で教育機関とは関係ない人物により出版された解剖学教科書と歯学教育機関が成立して、それぞれの教育機関で解剖学を教育していた教員が著わした解剖学書とに大きく分類された。今回は現在でも比較的著名な書として各大学の図書館で散見できる解剖学書について紹介を行うと共にこれまで出版された書について年代順に表にまとめてみた。(表)

### 1. 歯学教育機関とは関係なく出版された解剖学教科書 1. 『歯科解剖学』<sup>8)</sup>について(図1)

本書の記載は歯牙はもちろんのこと口腔周辺器官の形態について、説明解説された我が国での歯科医学生用の解剖学教科書として最初の翻訳書であり、そのタイトルは『歯科解剖学』である。明治24年4月17日に島村利助により金壹円にて販売されている。この本の原本のタイトル名は“The principle and practice of dentistry including anatomy, physiology, pathology, therapeutics, dental surgery and mechanism.”であり、米国フィラデルフィアのLindsay and Blakiston社から明治3年に初版が出版されている。著者の所蔵する第十版(明治12年)の構成は大きく四章にわけられ、第一



図1. 小島原泰民編訳『歯科解剖学』の表紙と奥付け(国立国会図書館所蔵)

章 Anatomy and Physiology, 第二章 Pathology and Therapeutics, 第三章 Dental Surgery, 第四章 Dental Mechanism から構成された総770ページにおよぶ歯科医学総合書である。原著者はHarris Chapin Aaron (1806-1860)氏で1828年には歯科医師としてボルチモアで開業した。日本語への翻訳者である小島原泰民(1858-1917)は旧姓を武田といい、福島県の出身であり、明治15年1月に医術開業試験に合格後、東京の神楽坂の賛化堂医院で内科医として開業しながら、東京歯科医学専門学校の講師を歴任している。小島原が同時に今回の解剖学書以外に『歯科解剖学図譜』、『歯科生理学』、『歯科病理各論』、『裁判歯科学』、『齢歯矯正論』、『奇形歯論』、『外科通論』、『歯科薬物学』、『歯科小枝』など多数を挙げることができる。これらの書は日本で最初の歯科材料商であった清水卯三郎<sup>6)</sup>が関係していた瑞穂屋書籍店出版部から出版されていることが『歯科解剖学図譜』の巻末の瑞穂屋書籍店の広告より知ることが出来る。記載内容に関して原本と翻訳本を比較してみると本書はほぼ原著の目録記載内容に従って翻訳されたことがわかる。しかし、原著のChapter I, IIについては翻訳本では省略されている。Chapter VIII, IXの記載に関しては翻訳より細部に章を作成して説明解説されている。翻訳本の記載内容に関しては原著の項目内容に従って逐次忠実に完全翻訳しているのではなく、翻訳者自身による簡約であり、原著内容記載説明の様な詳細さには欠けている。翻訳本の記載内容を順次に紹介する。まず、第一章 骨学、第二章 頭蓋及び顔面骨、第三章 筋学 軟口蓋 咽頭 扁桃腺、第四章 関節及び靱帯、第五章 口腔脈管 内頸動脈、第六章 口腔神経 三叉神経 神面神

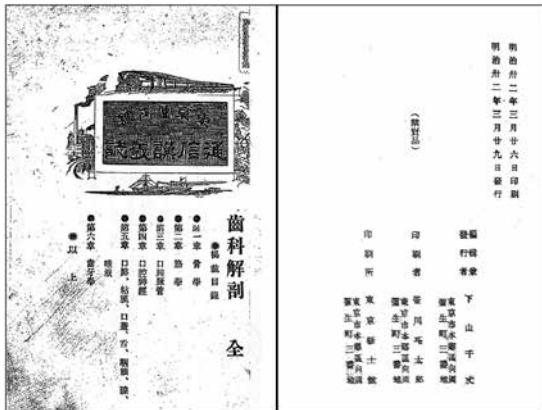


図2. 坂東直次述『歯科解剖』の表紙と奥付け（国立国会図書館所蔵）

経 舌咽頭神経 舌下神経，第七章 唾液腺及び唾液，第八章 舌及び口腔粘膜，第九章 歯根及び歯肉，第十章 口腔解剖的及び生理的關係，第十一章 歯牙学，第十二章 歯牙の形成及び起源，第十三章 歯牙の組織

以上の十三章の記載より構成され，骨学から始まり，口腔領域及びその周囲器官の解剖学的な解説記載本であることがわかる。

## 2. 『歯科解剖』について（図2）

本書は坂東直次述による『歯科解剖』というタイトルの書で明治32年に出版されている。この書は骨から始まり口腔領域に関する知識のまとめとして記載された書であり，下山千文により明治32年3月29日に編集兼発行されている。なおこの書の奥付けには非売品と記載されている。その記載内容としては第一章 骨学，第二章 筋学，第三章 口腔脈管，第四章 口腔神経，第五章 口腔，粘膜，口蓋，舌，咽頭，腺，唾液，第六章 歯牙学について記載されている。記載の簡潔な記述からして当時の歯科医術試験の為のまとめとして出版された書ではないかと考えられる。

## 2. 各教育機関における教員による代表的な解剖書の紹介

### ①東京歯科大学に關係する解剖学の教員による著書

我が国で最初の歯科医師養成機関の為に当時の著名な解剖学者が教育に関わっていることを記念誌などから知ることができる。今回，最初に紹介する解剖書は解剖学者ではないが，その後世界的な細菌学者となる野口英世による口述記録の『歯牙形態学』の書から紹介を行なう。

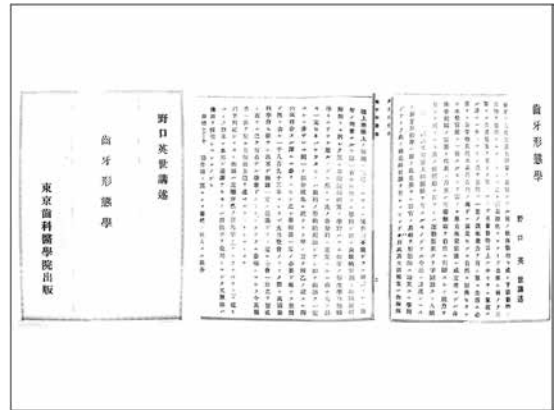


図3. 野口英世口述『歯牙形態学』の表紙と記載内容（東京歯科大学所蔵）

### 1. 『歯牙形態学』野口英世口述<sup>7,15)</sup>について（図3）

野口は「高山歯科医学院」の講師兼幹事であった血脇守之助<sup>6)</sup>と明治29年8月，血脇が会津若松に出張診療に向いた際に運命的な出会いをし<sup>15)</sup>，その後血脇により多大な援助を受ける。野口が医術開業試験受験のために上京し，明治29年10月に医術開業前期試験に合格すると，11月より血脇の世話により高山歯科医学院の学僕として働きながら，医術開業後期試験に合格，高山歯科医学院にて，病理学・薬物学の講師になっている。明治33年9月より血脇により引き継がれた「東京歯科大学」で歯科法医学の講義を行っている。その歯科法医学講義の中で“歯牙形態学”と“病理学総論”を担当し，その講義録が現在残されている。現在『歯牙形態学』のコピー製本は東京歯科大学図書館大学資料室に保管されていて，当時のオリジナルは現在の時点では東京歯科大学にも所蔵されていないし，もちろん国立国会図書館所蔵リストにも記載されていないので非常に貴重な書である。コピー製本は縦×横220×131mmの小型本であり総109ページと図譜6ページよりなり，奥付などは無い。表紙に東京歯科大学出版と記されており出版年度についての記載は見当たらないが，東京歯科大学図書館の資料室の記録から明治33年に出版されたとのことである。なおこの翻訳書（口述書）の原本は明治31年 Oscar Amoedo が著した“L'Art Dentaire en Médecine Légale”（歯科法医学書）であり，その中の“歯の解剖学”に関する章を野口が翻訳口述し，奥村鶴吉が筆記してまとめた書との報告がなされている<sup>7)</sup>。

記載内容としてはまず始めに歯という器官の定義及び意義付けが述べられている。原本では歯の形態に関

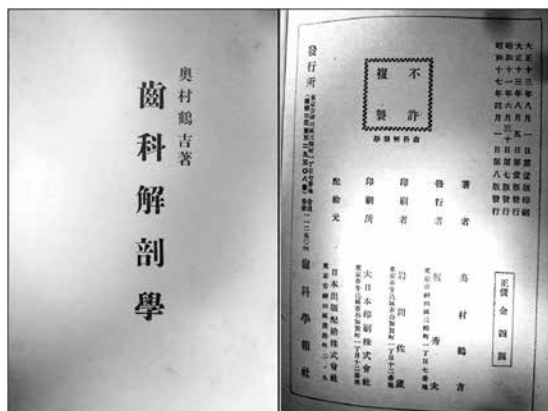


図4. 奥村鶴吉著『歯科解剖学』の表紙と奥付け（著者所蔵）

する用語がフランス語名で記されている。そのフランス語による用語を日本名に訳している。そしてその用語の一部についてはそれらの用語の意味の解説も記されている。記載された用語を列述順に列記すると、齒槽、隅又角、遠心隅、遠心唇隅、遠心頬隅、遠心舌隅、遠心咀嚼隅、近心隅、近心頬隅、近心唇隅、近心舌隅、近心咀嚼、根端、小白齒、齒槽突起縁、切截縁、頬舌的、頬的、齒根管、白質質、齒頸、隣接、腔角、齒根縁環線、齒冠、鈴狀冠、隆起線刃節櫛、舌齦櫛、辺縁櫛、斜行櫛、過剰櫛又附加櫛、横行櫛、三角櫛、凹窩、突起、犬齒、象牙質、乳齒、永久齒、嗣齒、厚頸齒、遠心側、珐瑯質、根端腔、隣間腔、破裂、舌齦破裂、窩又竇、切齒、齒牙偏位、唇的又唇側、唇舌的、舌的、舌的又舌側、正中線、齒根線、發育線、過剰葉、齒根縁、近心的、近心遠心的、触接點、互隣触接点、齒槽突起、接近、齒髓、齒根、溝、皺襞、中隔、溝、近心舌溝、過剰溝、發育溝、頬面、唇面、舌面、隣接面、部、齒根端孔、結節、正式咬合、前突咬合、後退咬合、常態巨態、生齒困難等である（当時の記載内容時に使用されている漢字体を記しておく）。すなわちこれらの用語は齒の形態を述べる際の重要な齒牙解剖学独自の用語である。本書の出現（講義録）以前には齒牙解剖学に関する用語についての教科書類の出版はされていないことから野口のこの口述書が我が国で最初の齒牙解剖学に関する書であり、かつ用語集である。その他としては、「東京齒科医学専門学校」で解剖学教科書として広く利用されていたと考えられる書としては奥村鶴吉著による『歯科解剖学』が現存している。

## 2. 『歯科解剖学』奥村鶴吉著について（図4）

この書のオリジンは『齒科学講義』シリーズ本の第

一卷でありその他に解剖関係書としては全22巻の中の第二巻『齒科組織学』（花澤鼎著）、第三巻『齒科胎生学』（花澤鼎著）の二冊が含まれている<sup>2)</sup>。この書の特色としては『歯科解剖学』という書名であるがその記載内容は口腔及びその周囲組織と齒についての解説と共にヒトと他の動物の齒の比較解剖を記載している点である。初版は大正13年8月5日に出版されている。本文は376ページ、索引は22ページよりなり当時四円にて東京の齒科学報社より出版されている。以下記載内容を目次に沿って紹介すると第一編 口腔、第一章 口腔の骨、第二章 下顎関節及咀嚼筋、第三章 口腔の各部、第四章 口腔の腺、第五章 口腔及其付近の血管、第六章 口腔及其付近の淋巴腺及淋巴管、第七章 口腔及其付近の神経、第二編 齒牙、第一章 総論、第二章 切齒、第三章 犬齒、第四章 小白齒、第五章 上顎大白齒、第六章 下顎大白齒、第七章 齒牙の支持組織及血管神経、第八章 齒牙の配列及咬合、第九章 乳齒、第三編 齒牙比較解剖である。

これらの記載内容から奥村の『歯科解剖学』は口腔及びその周辺の器官臓器と齒の形態の解説書であることが分かる。

### ②日本齒科大学に関係する解剖学の教員による著書

「日本齒科医学専門学校」時代に使用されていたと考えられる書としては新井千代之助口述の『齒牙解剖学』という齒に関する小冊子がある。宮原 虎が一部追加補足した書である。本書は齒に関する概論と共に各齒についての簡単な形態の説明書である。以下、その記載内容に関して紹介する。

### 1. 『齒牙解剖学』新井千代之助 述 宮原 虎 補について（図5）

目次に従って紹介すると、総論、各論 永久齒 門齒 犬齒 小白齒 上顎小白齒 下顎小白齒 大白齒 上顎大白齒 下顎大白齒

以上からこの書は齒の形態に関しての解説小冊子であることが分かる。

次に齒に関する解剖書としては齒科医学専門学校当時の書として柴田 信による『齒牙形態学』と『臨床齒牙形態図説』及び『齒牙形態写真図』の三冊をあげることができる。

### 2. 『齒牙形態学』柴田 信著について（図6）

記載内容としては、緒論、第一編 総論、第一章 齒牙の意義、第二章 齒牙の系統發生、第三章 齒牙の個体發生、第四章 生齒、第五章 齒牙の組織学的構造、第六章 齒牙硬組織の化学的組成、第七章 齒



図5. 新井千代之助述 宮原虎補『歯牙解剖学 全』の表紙（日本歯科大学所蔵）



図6. 柴田信著『歯牙形態学』の表紙と奥付け（著者所蔵）

牙硬組織の光学的構造，第八章 歯牙硬組織の硬度及び色澤，第九章 歯牙の形態，第十章 歯牙の数，第十一章 歯牙の支持及び排列，第十二章 歯牙の機能，第二編 形態，第一章 無脊椎動物の歯牙，第二章 魚類の歯牙，第三章 両生類の歯牙，第四章 爬虫類の歯牙，第五章 鳥類の歯牙，第六章 哺乳類の歯牙，第七章 現在人類の歯牙，第三編 構造，珐瑯質 象牙質 白堊質 歯髓 歯根膜 歯齦，第四編 発生，第五編 歯牙の進化・奇形，以上が『歯牙形態学』の中に記載されている内容である。次に柴田と黒河内による臨床的な観点より述べられた教科書について紹介する。

### 3. 『臨床歯牙形態図説』 柴田信 黒河内敏三 共著について（図7）

本書に記載された内容としては、

総説として I. 歯牙の生物学 II. 人の歯牙の形状 各論として I. 脱落歯の形態 A. 切歯 B. 犬歯 C. 臼歯 II. 増加歯の形態 III. 補充歯の形態 A. 切歯 B. 犬歯 C. 臼歯 IV. 歯牙を中心とする人類学的計測法 V. 歯型彫刻術式がこの図説に記載されている内容である。

以上、『歯牙形態学』、『臨床歯牙形態図説』についてそれぞれの書の記載内容を紹介した。これらの本の中に記載されている内容で現在も出版されている歯に関する形態学の書の中では記載されていない項目として特に注目すべき内容として歯の比較解剖学，発生学及び奇形についてがあげられる。この様な記載に関しては現代の出版されている歯の解剖についての教科書と比較すると興味深い相違点である。また『臨床歯牙形態図説』はタイトルの様に臨床的な観点からの記述

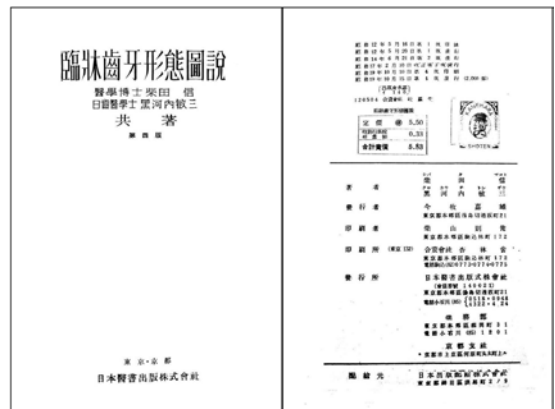


図7. 柴田信、黒河内敏三著『臨床歯牙形態図説』の表紙と奥付け（著者所蔵）

であり、歯型彫刻実習に使用された教科書と考えられる。また『歯牙形態写真図』では各歯牙，上・下顎骨の咬合などの多数の写真集である。おそらく当時としては写真集は画期的な書であったと考えられる。以上が歯に関する解剖学書である。次に一般（系統）解剖学の教科書としては東京帝国大学より出向いて授業を行っていた二村が、『歯科解剖学 全』を歯学生用の解剖学教科書を出版している。この書は大正14年5月10日に初版が金七円にて東京の金原書店より出版され本書の一部にはカラー図譜も含まれた（ドイツのゾボタ解剖書の引用図も含んでいる）全383ページより構成されている。この書の記載内容について紹介する。

### 4. 『歯科用解剖学 全』二村領次郎著について（図8）

第一編 骨学 各論，第一章 頭蓋骨，第二章 体幹骨，第三章 四肢骨 第二編 第二章 脊柱の関及靱帯，第三章 肋骨と胸椎及胸骨との結合，第四章

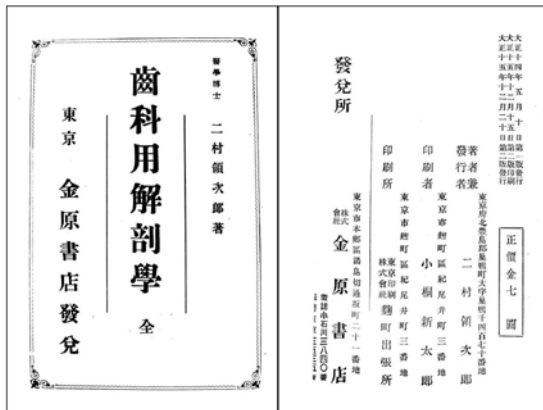


図8. 二村領次郎著『歯科用解剖学 全』の表紙と奥付け (著者所蔵)

上肢の関節及靱帯, 第五章 下肢の関節及靱帯 第三編 筋学, 第一章 頭筋, 第二章 頸筋, 第三章 胸筋, 第四章 腹筋, 第五章 横隔膜, 第六章 背筋, 第七章 上肢筋, 第八章 下肢筋, 第九章 筋膜 第四編 内臓学, 消化器 呼吸器 泌尿器 生殖器 腹膜 第五編 脈管学, 血管系 淋巴管系 第六編 神経学, 脊髓 脳髓 末梢神経 交感神経

以上より, この書はヒトの全身の構造を歯科学生用に簡明に記載解説されている解剖学教科書である。

#### ③大阪歯科大学に関係する解剖の教員による著書

大阪歯科大学での解剖学に関係する書としては小野寅之助の『実習用歯牙解剖学写真図譜』をあげることができる。本書はキャビネ版の写真120枚より構成されている写真集である。頭蓋写真から始まり各歯牙の近遠心, 頬舌面や咬合面観写真などが含まれている。以下がこの書を構成する代表的な写真のタイトルである。

#### 『実習用歯牙解剖学写真図譜』 小野寅之助編について (図9)

この写真図のタイトルを列記すると以下の様である。

頭蓋について安静咬合状態に於ける永久歯, 永久歯相互の対向関係を示す, 顎に植立せる永久歯列のレントゲン像, 永久歯相互特に臼歯咬合面の形態, 唇舌側観, 近遠心側観, 唇舌側観, 近遠心側観, 頬舌側観, 近遠心側観, 頬舌側観, 近遠心側観, 頬舌側観, 近遠心側観, 下顎大臼歯, 下顎第一大臼歯の根管, 上顎中切歯, 上顎中切歯の髓腔内, 上顎中切歯の唇面, 上顎中切歯の歯冠部, 上顎中切歯の舌面, 上顎側切歯の唇面, 上顎側切歯の舌面, 上顎側切歯の近心面, 上顎側

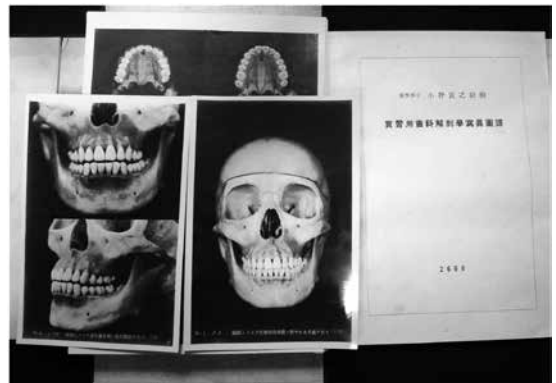


図9. 小野寅之助編『実習用歯牙解剖学写真図譜』の表紙と写真の一部 (著者所蔵)

切歯の遠心面, 下顎切歯の唇面像, 下顎切歯の舌面, 下顎切歯の近心面, 下顎切歯の遠心面, 上顎犬歯の唇面像, 上顎犬歯の舌面像, 上顎犬歯の近心面, 上顎犬歯の遠心面, 下顎犬歯の唇面像, 下顎犬歯の舌面像, 上顎小臼歯の咬合面性状主に第一小臼歯型, 上顎小臼歯の咬合面性状, 上顎小臼歯の頬面像, 上顎小臼歯の頬舌の縦断面, 下顎小臼歯の咬合面像, 下顎小臼歯の咬合面像, 下顎小臼歯の頬面像, 下顎小臼歯の頬舌面像, 下顎小臼歯の頬面像, 上顎中切歯の歯髓腔, 下顎切歯の歯髓腔, 下顎小臼歯に於ける複雑根管例, 上顎大臼歯に於ける歯髓腔, 上顎第一乳臼歯, 下顎第一乳臼歯, 上下顎歯第二乳臼歯

以上の様な写真を集めて帙様にした図譜本で当時としては特色ある形式の書の一冊と考えられる。

#### ④日本大学歯学部に関係する解剖学者の著書

日本大学歯学部の前身である「東洋歯科医学専門学校」の創立者である佐藤運雄による『歯科学通論』の中の誘導論の章に解剖論記述説明されている。この書は解剖学に関する書と云うよりはむしろ歯科概論的な書の導入編として歯の形態に関して記載された書でありこの書の初版は明治40年10月3日で, 東京の歯科学報社より出版されているが今回は解剖学書に限定しているのでその詳細は除く。今回は中川大介による『歯牙解剖学』について紹介する。本書は大正14年4月25日に歯科学報社より出版されている。その他としては伊澤好為, 林礼, 堀泰二による『歯科用最新人体解剖図譜』(図11)が出版されているがこの書は口腔周辺器官以外についての人体全体に関する図譜書として出版されているが本書の図のほとんどがスパルテホルツの解剖図をそのまま翻訳引用した書であるのでその詳

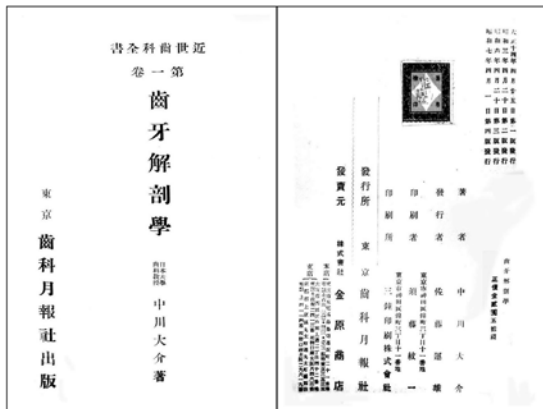


図10. 中川大介著『歯牙解剖学』の表紙と奥付け（著者所蔵）

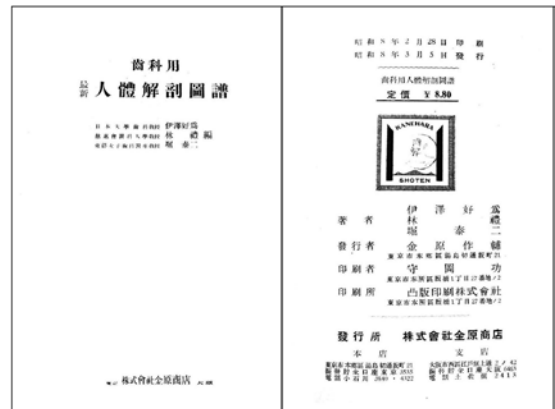


図11. 伊澤好為、林礼、堀泰二編『歯科用最新人体解剖図譜』の表紙と奥付け（著者所蔵）

細は省略する。

#### 『歯牙解剖学』中川大介著について（図10）

総論として 歯牙、歯牙各部の名称、髓腔、歯牙の硬度及比重、歯牙の構造、歯牙の測径、歯牙の象徵、各論として 永久歯、乳歯、歯牙比較解剖学

以上が本書の記載内容順に項目を紹介したがタイトルのごとく歯の形態だけについての解説書である。

#### ⑤東京医科歯科大学歯学部に関係する解剖学者の著書として

東京医科歯科大学で解剖学に関係した解剖書としては現在でも版を重ね出版されている藤田恒太郎著の『人体解剖学』の原本となった『歯科医学用 解剖学教科書』がある。藤田は東京大学医学部より当時の高等歯学専門学校に移り、その際に歯科学生のためのテキストとして作成された書で本書は全身の人体構造を要領よくまとめられている書である。さらに藤田は歯学部に移動してから多くの抜去歯を収集し、その結果を再び東京大学に戻ってから昭和24年6月5日に東京の日本医書出版株式会社より『歯の解剖学』として出版している。両書ともに現在に至るまで改定されつつ継続出版されている著名な書である。そこでこれらの著名な書についてまず『歯科医学用 解剖学教科書』、次に『歯の解剖学』についてそれらの書の記載内容について紹介する。

#### 1.『歯科医学学校用 解剖学教科書』藤田恒太郎著について（図12）

目次に従って項目を列記すると

緒論 骨格系（甲）総論（乙）各論 頭蓋 頭蓋の全景 頭蓋骨の連結 脊柱 胸郭 上肢の骨格 下肢の骨格 筋系（甲）総論（乙）各論 頭筋 頸筋

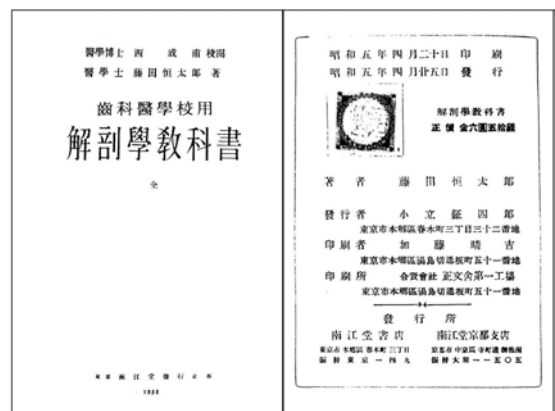


図12. 西成甫校閱、藤田恒太郎著『歯科医学学校用解剖学教科書』の表紙と奥付け（著者所蔵）

背筋 胸筋 腹筋 上肢筋 下肢筋 内臓学（甲）総論，（乙）各論，消化呼吸系（又は腸系），（甲）消化器，（乙）呼吸器，泌尿生殖器，（甲）泌尿器，（乙）生殖器，（A）男性生殖器，（B）女性生殖器，睾丸及び卵巣の下降，会陰及び会陰筋 視官系 総皮，視器，聴平衡器 脈管系 血管系，（甲）総論，（乙）各論，心臓，肺循環系，体循環，（A）動脈系，（B）静脈系，胎生時循環系，淋巴管系，（甲）総論，（乙）各論 神経系（甲）総論，（乙）各論，中枢神経系，中枢神経系の被膜・脈管・中心管系，末梢神経系，（A）動脈系，（B）静脈系，（C）交感神経系，神経系の伝導経路 以上である。

#### 2.『歯の解剖』について（図13）

目次に従って項目を列記すると

I. 緒論 歯とは何か，歯の機能，歯式，方向用語，



図13. 藤田恒太郎著『歯の解剖学』の表紙と奥付け（著者所蔵）

歯冠の形態 II. 永久歯 切歯，上顎第一切歯（中切歯），犬歯，小白歯，上顎第一小白歯，下顎第二小白歯，大白歯 IV. 乳歯 上顎中切歯，上顎側切歯，上顎犬歯，上顎第一臼歯，下顎第一臼歯 V. 歯群 歯列弓，咬合 VI. 歯の異常 歯数の異常，形態の異常

以上，藤田の代表的な二冊の書について紹介を行った。藤田の『歯科医学用，解剖学教科書』に関しては内容項目からも分かる様にヒトの人体構造について，簡潔に全身の解説がなされている。又『歯の解剖』に関しても各歯の詳細な解説説明がなされている。本書はこれまで以前に出版された他の歯に関する解剖学教科書と比較すると藤田による研究報告的な内容も含まれていてその記載内容の充実度がこれまでとは全く異なった書である。

旧歯科医学専門学校より新制歯科大学・歯学部として継続されている大学で当時の代表的な解剖学教育者による著書を調査し，それぞれの代表的な解剖学教科書について紹介を行った。ただ今回の調査において九州歯科大学については著名な一般的解剖書や歯に関する解剖学教科書類の出版書は著者の知るかぎり出版されておらず現存していない様であった。

次に“口腔”を冠した書について調査した。歯学部での解剖学を口腔解剖学と“口腔”を冠する様になってから“口腔”という名称を冠した解剖書が出版された様である。その最初の書としては松風陶歯創立記念歯科学全書刊行部が発行者となり全16巻の中の一冊として東京歯科大学の津崎孝道と斉藤久の共著により一冊本が京都・東京の永末書店より『口腔解剖学』として当時600円で昭和24年4月20日に初版が出版されている。本書の構成は口腔編が全82ページ，その索

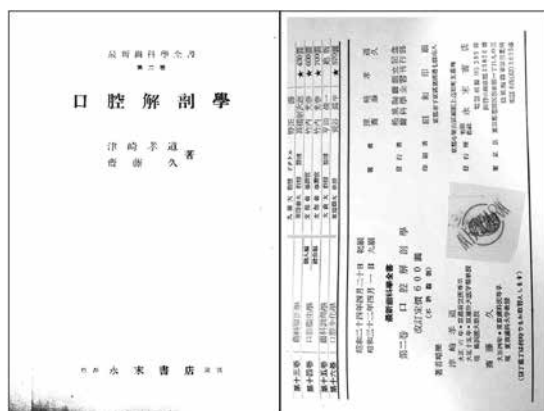


図14. 津崎孝道、斉藤久著『口腔解剖学』の表紙と奥付け（著者所蔵）

引はp83-97ページであり，歯牙編は本文が全55ページ，歯牙編付図が全21ページより構成されている。本書の記載内容ではタイトルからも分かる様に口腔編に関しては口腔周辺に関する骨，筋，腺，動・静脈と神経リンパに記載が限定されている。また歯牙については各歯牙についての説明と図が記されている。以下はこの記載内容の詳細である。

#### 『口腔解剖学』について（図14）

##### 口腔編として

I. 口腔の骨 II. 顎関節 III. 咀嚼筋 IV. 口腔の各部 V. 口（腔）腺 VI. 口腔及其の付近の脈管，A. 動脈，外頸動脈，B. 静脈，a. 内頸静脈，b. 上歯槽静脈 VII. 口腔及其の付近の神経，A. 脳神経に属する神経，a. 三叉神経，B. 自律神経に属する神経，C. 伝導路

##### 歯牙編として

歯に関する概論，各歯牙について（永久歯，乳歯），付図

以上，明治の中期頃から昭和30年代前半頃までに旧歯科専門学校より新制歯科大学，歯学部に至るまでの間に歯系の解剖学専門教育がどのような内容で行われていたかについて，当時使用されていた代表的でかつ現在でも手に取ることが可能な解剖学教科書類についての紹介である。

#### おわりに

今回，わが国における歯科医師養成機関の初期から戦後に至るまでの解剖学専門教育においてはどのような教育内容がなされていたかについて当時の教科書等から検討を行ってみた。また歯学部でよく使用される

“口腔”という用語に関してもいつごろから使用されていたかについても考察を加えてみた。まず解剖学教育は歯科医学教育が始まった前後頃から“解剖学”という名称での教科書は出版されているものの、その記載内容は口腔内部及びその周辺の器官、組織に局限した“解剖書”と歯科独特の解剖学分野である歯に関する形態学を教授するための“歯牙解剖学”の二種からなっている。その中で初期の頃の歯学教育機関では一般解剖学の教育はどこの機関でも全て医師又は医学部の教員が出向いての授業であったことが判る。授業の中でどの程度詳細にヒトの構造に関する全身教育がなされていたかに関してはその詳細は資料不足（当時の講義録等の現存が少ない）の為に不明な点も多く今後の調査検討の余地を残している。ヒトの全身構造に関する内容を記載された歯学生のための解剖学教科書が出版されたのは大正14年に『歯科用解剖学』というタイトルで二村領次郎により出版されたのが最初である。そしてその次に藤田恒太郎により『歯科医学用解剖学』が昭和24年に出版されている。今回、著者がまとめた表からも分かる様に多くの歯学部学生用の解剖学教科書が明治期中頃より戦前頃にかけて出版されている『歯科解剖学』は口腔及びその周辺の器官臓器に局限されたいわば局所解剖学書である。一方、歯に関する解剖書はやはり歯系教育で最も重要であるとの考えから多くの書（表を参照）が各教育機関の教員によって出版されている。注目に値する記載としてはこれらの多くの歯に関する形態学書では、“歯の比較解剖”に関する章を設けていることである。近年、出版されている多くの歯に関する解剖学教科書では歯の比較解剖に関する項目又は章として総体的に記載されていない教科書が多く見られる。また“口腔”という用語を冠する解剖学書を調べてみると（表を参照）昭和24年になって初めて“口腔解剖”という書名が出現する。それ以前には“口腔”を冠している書は全く出版されていない。戦後新制大学として歯学部が発足するにあたり、歯学系を“口腔解剖”と呼称するようになったことも関係があるものと察している。

これまで歯学系での解剖学教育に関しては講義名は解剖学と云っているがその講義内容の中心はやはり口腔周辺に限られた局所解剖学的内容で講義されている学校がほとんどであった。今後、医療の高度発展や高齢化へと社会の変化に伴い益々一般医科との連携が必要となっていく社会の中で歯科医学教育においても全身の人体構造知識は歯科医師として当然必須である。したがって歯系の基礎教育のひとつの学科目であ

る解剖学においても、“口腔”や“歯”という局所に関する解剖学教育に重点を置くのではなく医系と同様の人体構造教育を歯学生にも充分教授することが歯科医学・歯科医師の今後のさらなるレベルの向上につながると考える。

## 文献

- 1) 奥村鶴吉：野口英世 岩波書店、東京、1933
- 2) 学校法人 東京歯科大学：近代歯科医学教育を拓く 東京歯科大学創立120周年記念誌 p20-61 東京、2011
- 3) 学校法人 日本歯科大学：日本歯科大学60周年誌 p3-152 東京、1971
- 4) 学校法人 大阪歯科大学史編集委員会：大阪歯科大学史（一）p47, 82, 212 大阪、1981
- 5) 九州歯科大学五十年史編史委員会：九州歯科大学五十年史 p261-266 北九州、1967
- 6) 榊原悠紀田郎：歯記列伝 p30-34, 79-84, 85-90, 140-143, 144-150, 151-154, 161-167, 175-180 クインテッセンス出版社、東京、1955
- 7) 島田和幸、井出吉信：明治期の解剖書—野口英世の『歯牙形態学』について— 形態科学 11(2), p53-58, 2008
- 8) 島田和幸：明治期の解剖書—最初の歯科の翻訳解剖学教科書『歯科解剖学』について— 形態科学 14(1), p1-6, 2010
- 9) 歯界展望編：連載インタビュー 日本の歯科大学、大阪大学歯学部 歯界展望63(4), 医歯薬出版、東京、1984
- 10) 東洋女子歯科医学専門学校同窓会「東洋紫苑会」編：東洋女子歯科医学専門学校の六十八年 p385-407 東京、1985
- 11) 東京歯科大学百周年記念誌編纂委員会編：東京歯科大学百年誌 p13-85 東京、1991
- 12) 東京医科歯科大学編：東京医科歯科大学創立50周年記念誌 p23-55 東京、1984
- 13) 長尾優：一筋の歯学への道普請—東京医科歯科大学の歩み— 医歯薬出版株式会社 p172-197 東京、1966
- 14) 日本大学歯学部60年史編集委員会編：日本大学歯学部60年史 p1-81 東京、1979
- 15) 福田要：野口英世博士実録伝 日本産業研究所、東京、1928
- 16) 日本解剖学会百周年記念事業編：日本解剖学会百周年記念、教室史 p79-82, p109-110, p148-150,

p159-160, p253-254, p327-328 東京, 1995

表 歯科関係に関する解剖学書名及び出版年度一覧表

[明治期～昭和30年代（新制歯系大学の発足頃まで）]

著者・編者	書名	出版年度	出版社
小島原泰民編訳	歯科解剖学	1898	瑞穂屋書店
坂東直次述	歯科解剖	1899	東京修士館通信講義社
瓜生源太郎述 佐野千代太記	歯牙比較解剖学 解剖組織歯科一般 (高山歯科医学院講義録全8巻のうち巻7, 8の二冊)	記載がない	高山歯科医学院出版
野口英世口述	歯牙形態学	1900	東京歯科医学院出版
小島原泰民編	歯科解剖図譜	1902	瑞穂屋書店
花沢 鼎	歯科組織学	1910	東京歯科医学専門学校出版部
奥村鶴吉	歯科解剖学	1910	〃 〃
(花沢と奥村の二冊は『新纂歯科学講義』のシリーズ本の中に含まれている)			
牛丸茂章	歯科解剖学粹	1914	豊文堂書店
北村宗一	歯科解剖学問答	1914	文光堂書店
北村宗一	袖珍歯科解剖学	1915	文光堂書店
二村領次郎	歯科用解剖学	1925	金原書店
中川大介	歯牙解剖学	1925	東洋歯科月報社
藤田恒太郎	歯科医学校用解剖学教科書	1930	南江堂
柴田 信	歯牙形態学	1931	金原書店
伊澤好為	歯科用最新人体解剖図譜	1933	金原書店
伊澤好為等編	新歯科用解剖図譜	1933	南山堂書店
正木 正	歯牙組織学	1934	歯科学報社
花沢 鼎	歯牙組織図説	1935	歯科学報社
正木 正	発生学総論と歯牙発生学	1936	歯科学報社
柴田 信 国分史楼	歯牙組織発生学	1936	吐鳳社
柴田 信 黒河内敏三	臨床歯牙形態図譜	1937	吐鳳社
藤田恒太郎	歯牙組織学及発生学 (島峰歯学全書 11巻)	1942	金原書店
津崎孝道	歯科医学用解剖学	1943	金原書店
津崎孝道 斉藤 久	口腔解剖学 口腔編 歯牙偏 (最新歯科学全書目録)	1949	永末書店
藤田恒太郎	歯の解剖学	1949	日本医書出版
藤田恒太郎	歯の組織学	1958	医歯薬出版